

L. v. Beethoven

L. v. ベートーヴェン

交響曲第8番へ長調 op. 93

Symphony No. 8

—私の天使、私のすべて、私自身よ—

1827年3月27日、ベートーヴェンの死の翌日、この呼びかけで始まる三通の手紙「不滅の恋人への手紙」が、彼の机の秘密の引き出しから発見された。

この手紙には「いつ、どこで、誰に」という重要な情報があえて隠されたかのように記されていない。手紙に残された日付と曜日、湯治客名簿や警察記録等を手掛かりに伝記作家トーマス・サン＝ガリがベートーヴェンの旅行日程を解明したのは20世紀に入ってからのことである。

1812年7月4日土曜日、前日に「恋人」とプラハで過ごしたベートーヴェンはチェコの温泉地テプリッツ (Tepliz) に向けてあわただしく出発した。その夜の夜、目的地手前の宿場に到着した彼は「夜の森は危険だ」という忠告を無視し、真っ暗な夜道を馬車で下っていった。彼はなぜそれほどまでに急いでいたのか。それはテプリッツで「恋人」の手紙をいち早く受け取るためであった。7月6日ようやく手紙を手にしたベートーヴェンは、朝からこの一通目の手紙を書き始めた。

交響曲第8番はちょうどこの時、温泉療養のために訪れたこの地で作曲された。42歳を迎えたベートーヴェンはすでに聴力をほとんど失い、天然痘による近視眼を患っていた。しかし、「こんなにもがっかりした、エネルギーで、内面的な芸術家を私は見たことがない。」と文豪ゲーテに言わしめるほど、彼の創作意欲は高まっていた。

ベートーヴェン自ら「小交響曲」と呼び、可愛がったこの傑作を、彼の手紙とともに振り返ってみたい。

第一楽章 - Allegro vivace e con brio 四分の三拍子 へ長調

夏の日に窓から差し込む朝日のような第一主題。彼のほかの交響曲には類を見ない歓びに満ちた冒頭。彼の心は愛に溢れていた。

—今日も 昨日も どんなにあなたへの憧れに
涙したことか 私のいのち 私のすべて—

どこまでも透明な経過主題が総休止で立ち止まると、ファゴットによる二長調への案内をもって第二主題 [譜例 1] が出現する。ゲーテとともに歩いたテプリッツの街並みのようにゆったりとした旋律は、まるで時の流れが遅くなったかのように感じさせる。

ファゴット、クラリネット、オーボエ、フルートが第一主題を継ぎ目なく奏でると、展開部が力強く導かれる。第二ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの分散和音と管打楽器の強力な二分音符は第一ヴァイオリンを上下から挟み込み、展開部の終わりに解放される圧倒的な力は衰えることなく再現部へと流れ込む。

クラリネットのソロで始まるコーダは主題を再現することでクライマックスを形成し、弦楽器の pp で軽やかな着地を成功させる。



第二楽章 - Allegretto scherzando 四分の二拍子 変ロ長調

手紙の発見に立ち会った人物の一人に「ベートーヴェンの無給の秘書」を自称するアントン・シンドラーがいた。晩年ベートーヴェンを世話した彼だが、伝記を執筆するにあたり、記録の捏造のため数百冊の貴重な筆談ノートを処分した悪名高い人物でもある。

1840年、カノン『信愛なるメルツェル WoO162』 [譜例 2] がこの楽章の原案だとして彼の手で発表された。このメルツェルは1816年にメトロノームの特許を取得した人物で、興行師としてイギリス公演を持ちかけるなどベートーヴェンと関わりの深い人物であった。